

会員の皆様へ

この 2 月、トッパンホールで「ゴルトベルク変奏曲」を弾きました。弾いてみて、この曲は演奏者にかなりの自由が与えられていると思いました。たとえば、組曲のような舞曲が並んでいる曲の場合は、それぞれの舞曲の性格上、テンポや様式が必然的に決まってしまう、それからはずれた演奏だと、いわゆるバッハの様式感を無視した演奏ということになります。「ゴルトベルク変奏曲」の場合、たとえば、アリアはサラバンド、第 1 変奏はクーラント（コレンテ）など舞曲のスタイルをもっているものもありますが、変奏によってはまったく自由に（速く弾いても遅く弾いても、あるいはレガートで弾いてもノン・レガートで弾いても）してよいものもあります。それにしても、何と高貴な音楽なのでしょう。まるで、神がバッハの手を借りて書いたような感じです。

私が楽譜を見て弾いたことに驚かれた方もいらしたという話を聞いたので、そのことについて、ひとことふれておきましょう。そもそもピアニストは、音楽の流れが流暢に聴こえる、自由奔放に弾けるために暗譜するのであって、何も暗譜できたことをひけらかすためにしているわけではありません。「ゴルトベルク変奏曲」は、コンサート用に書かれたものでもないし、曲を書いた目的が不眠症をなおすため、その時々に変奏をいくつか弾いて聴かせる、つまり、当時としては全曲通しては演奏されなかったということなどを考えると、暗譜する必然性がないと以前から思っていました。大事なものは音楽そのもの、その音楽だけを聴いてほしい、ふつうのコンサートのような集中度というか、緊張に溢れているとはまったく違って、自分の家ででも寛いで弾いているような雰囲気を感じてみたいと思ったわけです。オーストリアやドイツのような古典音楽の伝統のある国では、バッハは暗譜をした上で、楽譜を置いて弾きなさい、と教えているようです。

秋のふらんす plus は、フォーレの弟子で、今年没後 50 年になるフロラン・シュミットを取り上げます。フロラン・シュミットの曲を初めて聴いた時、その官能的で壮大な音楽に衝撃を受けたおぼえがあります。ここでその作風について言うつもりはありませんがー彼は多作家なのですべての曲を知っているわけではありませぬー、一種の風格というものがただよっているのが彼の美点ではないかと思えます。前半には、ドイツ・ロマン派音楽の真髄ともいえるシューマンを入れました。お楽しみ下さい。

2008 年 5 月 ロンドンにて  
岡田 博美